

①真夏の宿場は空虚であった。ただ目の大きな一匹の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の巣にひっかかると、後肢で網を跳ねつつしばらく【A】揺れていた。と、豆のように【B】落ちた。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている糞の端から、裸体にされた馬の背中まではい上がった。

馬は一条の枯れ草を奥歯にひっかけたまま、猫背の老いた馭者の姿を捜している。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

「なに？ 文句を言うな。②もう一番じゃ。」

すると、ひさしを逃れた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかってきた。

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駆けつけた。彼女はこの朝早く、街に勤めている息子から危篤の電報を受け取った。それから露に湿った三里の山路を駆け続けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馭者部屋をのぞいて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

ゆがんだ畳の上には湯飲みが一つ転がっていて、中から酒色の番茶がひとり静かに流れていた。農婦は【C】場庭を回ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかのう？」

「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早よ来るとよかったのじゃが、もう出ぬじゃるか？」

③農婦は性急な泣き声でそう言ううちに、はや泣きだした。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立っていてから、街の方へ【D】歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

④猫背の馭者は将棋盤を見つめたまま農婦に言った。農婦は歩みを止めると、【E】向き返ってその淡い眉毛をつり上げた。

「出るかの。すぐ出るかの。せがれが死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」

「桂馬と来たな。」

「まあまあうれしや。街までどれほどかかるじゃろ。いつ出しておくれるのう。」

「二番が出るわい。」と馭者は【F】歩を打った。

「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたっぷりかかりますやろ。せがれが死にかけていますのじや、間に合わせておくれかのう？」

野末の陽炎の中から、種れんげをたたく音が聞こえてくる。若者と娘は宿場の方へ急いで行った。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。

「持とう。」

「なアに。」

「重たかろうが。」

若者は黙っていかにも軽そうな様子を見せた。が、額から流れる汗は塩辛かった。

「馬車はもう出たかしら。」と娘はつぶやいた。

若者は荷物の下から、目を細めて太陽を眺めると、

「ちよつと暑うなったな、まだじやろう。」

二人は黙ってしまった。牛の鳴き声をした。

「知れたらどうしよう。」と娘は言うちよつと泣きそうな顔をした。

⑤種れんげをたたく音だけが、かすかに足音のように追ってくる。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。

「私が持とう。もう肩が治ったえ。」

若者はやはり黙って【G】歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」とつぶやいた。

・本文を読み問いに答えなさい。(解答はすべてノートに記載しなさい)

問1 空欄A～Gに入る語句を、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ア どしどしと イ うろろると ウ すたすたと エ ぼんと
オ ぶらぶらと カ くるりと キ ぼたりと

問2 傍線部①「真夏の宿場は空虚であった」とは、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選べ。

- ア 真夏の宿場は、人が生きていくことのむなしさを暗示していたということ。
イ 真夏の宿場は、田舎暮らしの張り合いのなさを象徴していたということ。
ウ 真夏の宿場は、出発を急ぐ人々のいらだちを映し出していたということ。
エ 真夏の宿場は、人がいる気配もなくひっそりと静まりかえっていたということ。
オ 真夏の宿場は、たくさんの蠅がたかるほど汚れたまま放置されていたということ。

問3 傍線部②「もう一番じゃ」とあるが、この時の馭者の心情の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 将棋の負けが続いているせいで、出発の時間が遅れてしまうのではないかと不安にかられている。
イ 馬車を出すのが面倒くさいので、将棋の勝負にかこつけてこのままさぼっていたと考えている。
ウ 将棋の腕には自信があるので、もう一番させば間違いなく勝てるはずだという確信を強めている。
エ 将棋のことはさておき、とにかく早く饅頭ができればいいだろうかと待ち遠しく思っている。
オ 出発までの時間を過ごすためにさしている将棋で、思わぬ負けが続いたことを悔しく思っている。

問4 傍線部③「農婦は性急な泣き声でそう言ううちに、はや泣きだした」とあるが、農婦が「泣きだした」理由として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 馬車がいつ出るのかを誰も教えてくれないので、仲間外れにされた気分になり腹が立ったから。
イ 饅頭屋の主婦の告げた言葉が息子の死を暗示しているような気がして、急に不安になったから。
ウ 危篤の息子に会うため街へ急いでいるのに既に馬車が出発したものと思ひ込み、落胆したから。
エ 街へ急ぎたいあまり、今すぐ馬車を出してほしいというわがままを抑えられなくなったから。
オ 自分が泣いて同情を買えば、少しでも早く馬車を出してくれるのではないかと期待したから。

問5 傍線部④「猫背の馭者は将棋盤を見つめたまま農婦に言った」とあるが、この時の馭者の心情の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 将棋に集中したいのに、横からその邪魔をする農婦をうっとうしく感じ、適当にあしらっている。
イ 極端な猫背のせいで、自分に声をかけてくる農婦のほうに振り向くことができず、困惑している。
ウ 将棋の勝負に気を取られる一方で、出発を気にする農婦の焦りを察し、一定の配慮を示している。
エ 自分から将棋の再戦を申し出たにもかかわらず、再び劣勢に立たされてしまい、いらだっている。
オ 将棋の決着を長引かせることで出発の時間を遅らせ、農婦たち乗客に意地悪をしようとしている。

問6 傍線部⑤「種れんげをたたく音だけが、かすかに足音のように追ってくる」とあるが、この表現から読み取れる「娘」の心情の説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 種れんげをたたく音が、既に出発した馬車の馬の足音のように感じられ、遅刻したのではないかと不安を募らせている。
イ 種れんげをたたく音が、人々が馬車に乗り込む足音のように感じられ、自分たちも乗り遅れまいと焦りを募らせている。
ウ 種れんげをたたく音が、自分のもとから立ち去っていく若者の足音のように感じられ、別離の寂しさを募らせている。
エ 種れんげをたたく音が、若者と逃げようとしている自分を追う何者かの足音のように感じられ、不安を募らせている。
オ 種れんげをたたく音が、自分たちに絶えずつきまとい続ける蠅の羽音のように感じられ、うっとうしさを募らせている。

宿場の場庭へ、母親に手を引かれた男の子が指をくわえて入ってきた。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」①男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ駆けてきた。そうして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりヤッ、こりヤッ。」と叫んで片足で地を打った。

馬は首をもたげて耳を立てた。男の子は馬のまねをして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただやたらに馬の前で顔をしかめると、再び「こりヤッ、こりヤッ。」と叫んで地を打った。

馬はおけの手づるに口をひっかけながら、またその中へ顔を1カクして馬草を食った。

「お母ア、馬々。」

「ああ、馬々。」

「おっと、待てよ。これはせがれの下駄を買うのを忘れたぞ。あいつはすいかが好きじや。すいかを買うと、俺もあいつも好きじやで2リョウトクじや。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けたかいあって、昨夜ようやく春蚕の仲買いで八百円を手に入れた。今彼の胸は②未来の画策のために詰まっている。けれども、昨夜銭湯へ行つたとき、八百円の札束を鞆に入れて、洗い場まで持つて入って笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭の床几から立ち上がると、彼のそばへ寄ってきた。

「馬車はいつ出るのござんしような。せがれが死にかかっていますので、早よ街へ行かんと死に目に会えまい思いましてな。」

「そりやいかん。」

「もう出るのござんしような、もう出るつて、さつき言わしやつたがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入ってきた。農婦はまた二人のそばへ近寄つた。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者はき返した。

「出ませんの？」と娘は言った。

「もう二時間も待っていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横から言った。農婦はくると彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と言つうちにまた泣きだした。が、すぐ饅頭屋の3テントウへ駆けていった。

③まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじやろか？

猫背の馭者は将棋盤を枕にしてあおむきになつたまま、すのこを洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいのう？」

馬車は何時になつたら出るのであろう。④宿場に集まつた人々の汗は乾いた。しかし、⑤馬車は何時になつたら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知りうることでできるものがあつたとすれば、それは饅頭屋のかまどの中で、ようやく4フクれ始めた饅頭であつた。なぜかと言えば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけないう蒸し立ての饅頭に初手をつけるということが、それほどの潔癖から⑥長い年月の間、独身で暮らさねばならなかつたという彼のその日その日の、最高の慰めとなつていたのであつたから。

宿場の柱時計が十時を打った。饅頭屋のかまどは5ユゲを立てて鳴りだした。

⑦ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を充分飲みためた。ザク、ザク、ザク。

・本文を読み次の問いに答えなさい。(解答はすべてノートに記載しなさい)

問1 傍線部1～5の片仮名を漢字に直せ。

問2 傍線部①「男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ駆けてきた」とあるが、男の子のこの行動についての説明として適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ア 自分の手を握り続ける母親のことをうとましく思い、隙を見て逃げ出そうとしている。
- イ 母親の制止を振り切って駆け出すほど、一刻も早く馬車に乗って出発したいと思っている。
- ウ 宿場の場庭に何かおもしろいものがあるのではないかという期待から、思わず駆け出している。
- エ 馬に対して強い好奇心を抱き、母親に邪魔されず少しでも厩に近づこうとしている。
- オ 初めて見る馬に恐怖心を覚え、隣の母親のことも忘れて場庭から逃げ出そうとしている。

問3 傍線部②「未来の画策」とは、どういうことか。三五字以内で具体的に説明せよ。

問4 傍線部③「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじゃるか？」とあるが、この問いかけの裏には、農婦のどのような思いが込められているのか。四〇字以内で説明せよ。

問5 傍線部④「宿場に集まった人々の汗は乾いた」とあるが、これはどのようなことを表現しているのか。次の中から適当なものを一つ選べ。

- ア 出発に間に合うように宿場に駆けつけたにもかかわらず、汗も乾くほど長い間待たされたこと。
- イ いくら汗をかいてもあつというまに乾いてしまうほど、真夏の朝の日照りが強烈だったこと。
- ウ 馬車がとうとう出発しないのではないかと不安が、汗も乾くほど高まっていったこと。
- エ 時間がたつにつれて初めの頃より涼しくなってきたので、汗をかくほどではなくなったこと。
- オ 馭者が曖昧な態度をとっているうちに、いつ出発するのかという乗客の焦りも収まったこと。

問6 傍線部⑤「馬車は何時になったら出るであろう」とあるが、それを知りうるのが「饅頭」だけであると言えるのはなぜか。三五字以内で説明せよ。

問7 傍線部⑥「長い年月の間、独身で暮らさねばならなかった」とあるが、本文中でその理由はどのように語られているか。四五字以内で説明せよ。

問8 傍線部⑦「ザク、ザク、ザク」とあるが、この擬音語は表現上どのような効果を持っているか。次の中から適当なものを一つ選べ。

- ア 出発まで更に待たされると察した乗客のいらだちを示す効果。
- イ 出発の時間が近づき事態が動きだすことを読者に知らせる効果。
- ウ 出発の準備を始めて馬の動きが活発になったことを表す効果。
- エ 饅頭を早く売り出すよう催促する馭者の心情を暗示する効果。
- オ 出発の準備を急入りに行う馭者の几帳面さを感じさせる効果。

「おっと、待てよ。これはせがれの下駄げたを買うのを忘れたぞ。あいつはすいかが好きじゃ。すいかを買うと、俺もあいつも好きじやで両得じや。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けたかいあって、昨夜ようやく春蚕はるこの仲買いで八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰まっている。けれども、昨夜銭湯へ行ったとき、①八百円の札束を鞆たばに入れて、洗洗い場まで持つて入入つて笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭ばにわの床几しょうぎから立ち上がる、彼のそばへ寄ってきた。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。せがれが死にかかっていますので、早はよ街へ行かんと死に目に会えまい思いましたな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのでござんしょうな、もう出るって、さつき言わしやったがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入ってきた。農婦はまた二人のそばへ近寄った。

「馬車に乗りなざるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者はきき返した。

「出ませんか？」と娘は言った。

「もう二時間も待つていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になつていますかな。街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりゃ正午や。」と田舎紳士は横から言った。農婦はくると彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と言ううちにまた泣きだした。が、すぐ饅頭屋まんじゅうの店頭へ駆けていった。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじやろか？」

猫背の馭者きよしやは将棋盤を枕まくらにしてあおむきになったまま、すのこを洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「②饅頭はまだ蒸こざらんかいのう？」

馬車は何時になつたら出るのである。宿場に集まった人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になつたら出るのである。これは誰も知らない。だが、もし知りうることであるものがあつたとすれば、それは饅頭屋のかまどの中で、ようやく膨れ始めた饅頭であつた。なぜかと言えば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手しよてをつけるということが、それほど潔癖から長い年月の間、独身で暮らさねばならなかったという彼のその日その日の、最高の慰めとなつていたのであつたから。

③宿場の柱時計が十時を打った。饅頭屋のかまどは湯気を立てて鳴りだした。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切った。馬は猫背の横で、水を充分飲みためた。ザク、ザク、ザク。

馬は馬車の車体に結ばれた。④農婦は真まつ先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗まつとくれやア。」と猫背は言った。

⑤五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦のそばへ乗り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋のすのこの上で、綿のように膨らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと馭者台の上にその背を曲げた。らつぱが鳴った。むちが鳴った。

目の大きなかの一匹の蠅はえは馬の腰の余肉あまじしの匂いの中から飛び立った。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、ようやく蜘蛛くもの網からその生命を取り戻した体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。

馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑の横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、ようやくたまった馬の額の汗に映つて逆さまに揺らめいた。

⑥馬車の中では、田舎紳士の饒舌じょうぜつが、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生き生きした目で野の中を見続けた。

「お母ア、梨々。」

「ああ、梨々。」

⑦馭者台ではむちが動き止まった。農婦は田舎紳士の帯の鎖に目をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者台ではらつぱが鳴らなくなった。そうして、腹掛けの饅頭を、今やことごとく胃の腑ふの中へ落とし込んでしまった馭者は、いつそう猫背を張らせて居眠りだした。その居眠りは、馬車の上から、かの目の大きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光を受けて真っ赤に映えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下ろして、そうして、馬車が高い崖路がけみちの高低でかたかたときしみだす音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅かにただ蠅一匹であるら

しかった。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下がった半白の頭に飛び移り、それから、ぬれた馬の背中にとまって汗をなめた。馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた目隠しの中の路に従って柔順に曲がり始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることはできなかった。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は飛び上がった。と、車体と一緒に崖の下へ墜落していく放埒な馬の腹が目についた。そうして、人馬の悲鳴が高くひと声発せられると、河原の上では、押し重なった人と馬と板片との塊が、沈黙したまま動かなかった。が、⑧目の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を込めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

・本文を読み問いに答えなさい。(答えはすべてノートに記載すること)

問1 傍線部①「八百円の札束を鞆に入れて、洗い場まで持って入って」とあるが、このような行動をとったのはなぜか。この時の田舎紳士の心情に即して、四〇字以内で説明せよ。

問2 傍線部②「饅頭はまだ蒸さらんかいのう？」とあるが、農婦の問いかけに対して馭者がこのように答えたのはなぜか。次の文の空欄に当てはまる言葉を、本文中から二二字で抜き出して答えよ。

馭者は【 】ことを日課としており、それを実行するまでは馬車を出せないから。

問3 傍線部③「宿場の柱時計が十時を打った」とあるが、この時点では、馬車が街に到着するのは何時頃になると考えられたか。次の中から適当なものを一つ選べ。

ア 午前十一時過ぎ イ 正午過ぎ ウ 午後一時過ぎ エ 午後二時過ぎ オ 午後三時過ぎ

問4 傍線部④「農婦は真つ先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた」とあるが、この様子は農婦のどのような気持ちを表しているか。三〇字以内で説明せよ。

問5 傍線部⑤「五人の乗客」とあるが、この乗客に当てはまる五人を、次の中から全て選べ。

ア 馭者 イ 男の子 ウ 母親 エ 饅頭屋の主婦 オ 田舎紳士
カ 若者 キ 娘 ク 農婦 ケ 蠅 コ 饅頭

問6 傍線部⑥「馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした」とあるが、これはどういうことか。三五字以内で説明せよ。

問7 傍線部⑦「馭者台ではむちが動き止まった」とあるが、それはなぜか。二五字以内で説明せよ。

問8 傍線部⑧「目の大きな蠅」は、どのような光景を目撃したのか。五〇字以内で説明せよ。

蠅①

- 問1 A || オ B || キ C || イ D || ウ E || カ F || エ G || ア (各2 | 14点)
- 問2 エ
- 問3 オ
- 問4 ウ
- 問5 ウ
- 問6 エ

蠅②

- 問1 1 || 隠 2 || 両得 3 || 店頭 4 || 膨 5 || 湯気
- 問2 エ
- 問3 春蚕の仲買いで手に入れた八百円をこれからどのように使うか考えること。(三四字)
- 問4 息子の死に目に間に合うよう街へ行きたいので、早く馬車を出してほしいという思い。(三九字)
- 問5 ア
- 問6 馬車が出発する時間は、饅頭が蒸しあがる時間によって決まるから。(三二字)
- 問7 馭者は毎日蒸し立ての饅頭に初手をつけなければ気がすまないほど潔癖な性格だったから。(四一字)
- 問8 イ

蠅③

- 問1 生まれて初めて手に入れた大金を、入浴中に誰かに取られては困ると思ったから。(三七字)
- 問2 誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつける
- 問3 ウ
- 問4 死にかかっている息子のもとへ一刻も早く駆けつきたい気持ち。(二九字)
- 問5 イ・ウ・オ・カ・キ
- 問6 馬車の乗客たちが、田舎紳士のおしゃべりのおかげで打ち解けたということ。(三五字)
- 問7 馭者が饅頭を食べて満腹になり、居眠りを始めたから。(二五字)
- 問8 馭者の居眠りのせいで制御を失った馬が、客を乗せた車体と一緒に崖の頂上から河原まで転落していく光景。(四九字)